

今月のテーマは「宵の明星」

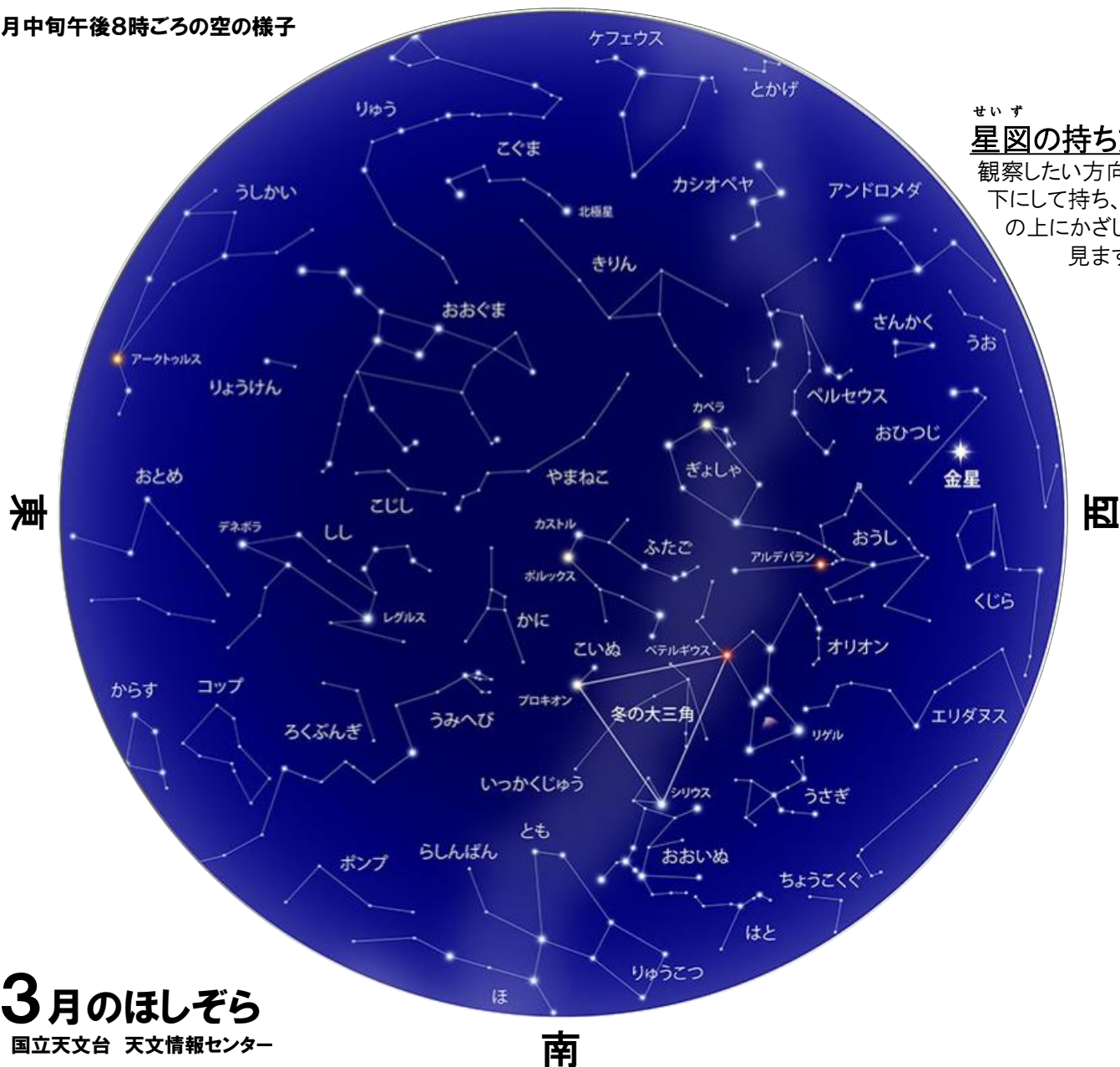
ほしぞら通信

2020-3
No.46

星はすばる。ひこぼし。ゆふづつ。よばひ星、すこしをかし。尾だになからましかば、まいて。平安時代の女流作家・清少納言の随筆「枕草子」にはこのように書かれています。プレアデス星団(すばる)、わし座のアルタイル(ひこ星)に次ぐ3番目に挙げられている「夕づつ」が、宵の明星のことです。昔の人もその美しさに魅かれていたのですね。続きの「夜ばい星」は流れ星のことで、『尾っぽがなかったら、もっといいのに。』という感想が書かれています。

非

3月中旬午後8時ごろの空の様子



せいず
星図の持ち方
観察したい方向を下にして持ち、頭の上にかざして見ます。

3月のほしぞら

国立天文台 天文情報センター

- 3日 上弦
- 5日 啓蟄(太陽黄経345度)
- 8日 海王星が合
- 9日 水星が留
- 10日 〇満月
- 16日 下弦
- 17日 彼岸の入り
- 19日 明け方の東の空に月、火星、土星、木星が並ぶ
- 20日 春分の日/春分(太陽黄経0度)
- 24日 ●新月/水星が西方最大離角
- 25日 金星が東方最大離角

星空のみどころ

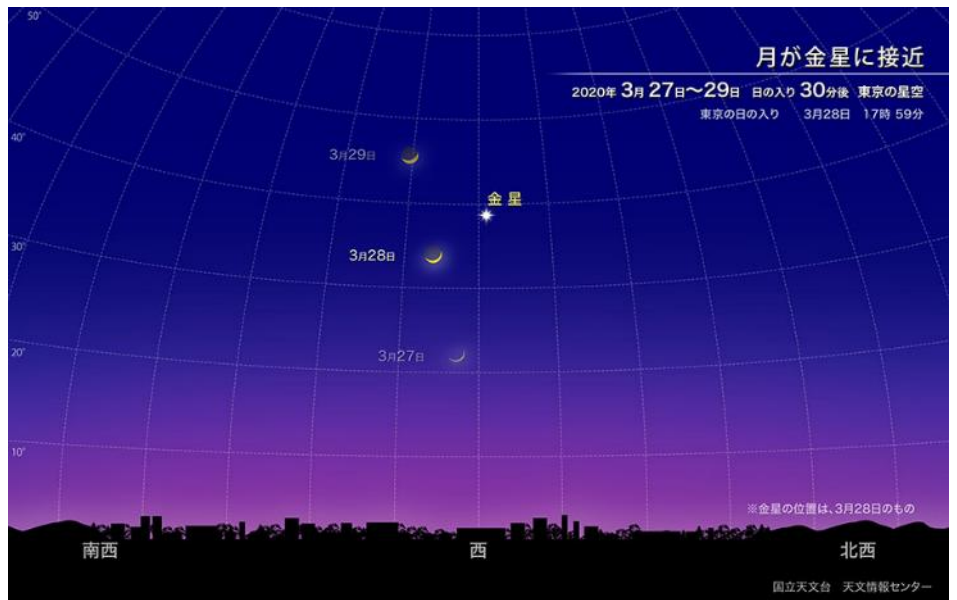
西空のおひつじ座に見えている金星は、まもなく隣のおうし座に移ります。プレアデス星団との大接近は4月4日です。減光中で注目されているオリオン座のベテルギウスの明るさを周りの星と比べてみましょう。冬の三大角のこいぬ座プロキオンは0.4等、赤っぽいアルデバランは0.9等、一番暗い1等星であるしし座のレグルスは1.4等です。オリオン座の2等星ベラトリックスは1.6等。ふたご座の兄弟は、兄カストルが1.6等、弟ホルルクスが1.1等です。

宵の明星

「宵の明星」とは**金星**のことです。

金星は「**明けの明星**」にもなります。

一番明るいときに-4.7等級になってたいへん目立つので明星と呼ばれています。太陽の周りを225日の周期で公転している太陽系第2惑星です。地球の公転軌道の内側を回っている

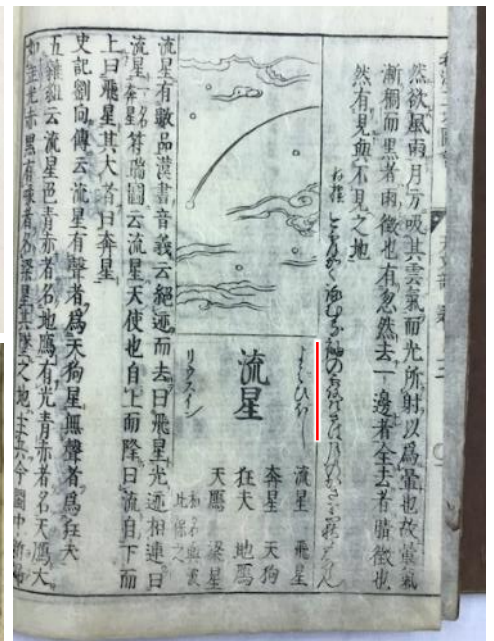


ため、**太陽の反対側に見えることはありません**ので真夜中には見えません。太陽の東側に見えたり西側に見えたりします。東側に見えるときが宵の明星、西側に見えるときが明けの明星になります。この金星を天体望遠鏡で見ると、**月のように満ち欠けをしている**のがわかります。金星は地球より少し小さい惑星で、二酸化炭素を主成分とする空気です。地表の気温が約500℃の熱い惑星です。今までにアメリカ、旧ソ連、日本の探査機が行って調査しているため、厚い雲で覆われているため地球からは見えない金星の地表の様子などもかなりわかってきています。今年5月末まで「宵の明星」として眺めることができます。

Mayucosmos
Recommend ◆体験レポート◆
おすすめ情報 博物館収蔵品紹介

江戸時代の百科事典 「和漢三才図会」

「和漢三才図会（わかんさんさいすえ）」は、江戸時代に編さんされた百科事典です。明（中国）の辞典をもとにつくられており、動物・植物・道具など分野ごとにイラスト入りで紹介されています。全105巻81冊に及ぶ膨大なものです。そのうち、第1巻の「天文」には、太陽や惑星、月の満ち欠けの他、日食・月食について書かれています。第2巻「二十八宿」は中国で使われてきた星座が紹介されています。第3巻「天象」には、雪・虹・雷など様々な気象現象に加えて、彗星・流れ星の項目もあります。江戸時代の人もこの百科事典で調べたり、勉強したりしていたのでしょう。



上:「和漢三才図会」第3巻『天象』 当館蔵
「流星」は、和名「よばひぼし」と書かれている。
左:「和漢三才図会」第1巻『天文』 当館蔵
金星についての解説。和名「ゆふづつ」とある。

一般投影 4月のテーマ「二重星のひみつ」

投影日 4/4(土)、5(日)、11(土)、12(日)、18(土)、19(日)、25(土)、26(日)、29(祝・水)
投影時間 ①10:30～11:15 ②13:30～14:15(各回約45分間)

茅野市八ヶ岳総合博物館

〒391-0213 長野県茅野市豊平6983番地

TEL 0266-73-0300 FAX 0266-72-6119 メールアドレス y.hakubutsukan@city.chino.lg.jp

入館料 大人310円/高校生210円/小中学生100円 ※諏訪6市町村在学・在住の小中学生は無料
開館時間 午前9時～午後4時30分 休館日 毎週月曜日、祝日又は休日の翌日、年末年始